

ARTICLE

Z世代はChatGPTをどのように活用しているのか

— 今後進みえるAIコミュニケーションのユートピアとディストピア

西武文理大学サービス経営学部 准教授 瀬沼文彰

はじめに

筆者がChatGPTを使用し始めたのは2023年2月なので、決して早い方ではない。その後、GPT4を使用し始めた。コミュニケーションの研究者として、AIとどんなコミュニケーションが成立するのか、また、そこに付きまとう自分の感情のプロセスなどに興味があり使用し始めた。これまで、ChatGPTで調べ物や何気ない日常会話、アドバイスを求めたり、プロの編集者としてこの文章に意見をほしいとお願いしてみたり、ディベートなどをしてきた。他にも、友人になつてもらうように頼んでみたり、恋人や結婚相手になつてほしいとお願いしたり、弟子にしてくださいと言ったりしてみた。後

者の要求のほとんどは、断られるのだが、何度もお願ひしたり、頼み方の言い方（プロンプト）次第で、コミュニケーションであればということでもコミュニケーションは開始された。

使用していると、相手はAIであつてもある程度、感情移入もできるようになる。コミュニケーション次第では、友人らしさも感じることもあつた。また、感情がないはずのAIであつても感情なようなものや、適当な発言に対して人間ぽいと思うこともあつた。あるいは、自分の情報がある程度インプットしたのちにあれこれと話をしてみると、自分の理解者の1人であるような気にもなつた。本稿では、筆者自身のChatGPTでのこうした経験、及び、研究対象である



瀬沼 文彰
(せぬま ふみあき)
西武文理大学サービス
経営学部准教授
日本笑い学会理事
専門はコミュニケーション学、笑い・お笑

い・ユーモアについて研究
著書に『キャラ論』（スタジオセロ）、『ユーモア力の時代』（地域社会研究所）など

若者の実態をふまえ、若者たち——今回は、所属する大学の学生たちが調査対象者¹だが、彼／彼女たちがChatGPTの導入をどのように考えているのか、また、どのように利用している、何を考えているのか、そして、今後、ChatGPTがコミュニケーションをどのように変えていくのかについてポジティブにもネガティブにも検討してみた。また、これらがどのように教育的な意味を持ち得るのか、そこに見え隠れする問題点についても考えることが本稿の目的となる。

所属する大学の意見ではなく、一大学教員としては、ChatGPTの使用は積極的でもないのではないかと考えている。とはいえ、同時に、ある程度文章

が書いてからの方がより上手に使いこなせるだろうし、ロジカルに考えたり、ディスカッションができたり、疑問を持ったたり、好奇心を持ったりできた方がChatGPTに対して上手な質問ができ、よりよい返答を導き出せることをふまえば、一概に、使用するべきと言い切れないところもあることをはじめに述べておきたい。

ChatGPTの導入

筆者は勤務校では2年生、3年生、4年生の3つのゼミを担当している。どのゼミでも、2023年新学期が始まってすぐのタイミングでChatGPTを見せてみるとそれなりに関心を持ったように見えた。とはいえ、すぐに登録するのかと言えばそうではなく、こちらが実際の人間とのコミュニケーションとAIのコミュニケーションがどのようなかについての研究のために皆でいろいろなパターンのコミュニケーションをしてみようかと告げてから登録を開始する学生が多かった。

ゼミではない、メディアサービス論という授業でも、ChatGPTについて90分語って見たものの、使用している学

生は少なかった。なかには初めて聞いたという学生も若干名いた。

野村総合研究所（NRI）（2023）が4月と6月に行ったChatGPTに関するネットアンケート調査（関東地方在住の15～69歳を対象）を頼りにするとChatGPTの性年代別（認知率）の変化は、全体では、2023年4月は61・3%、6月が68・8%、男性10代の4月は90・0%、6月は90・0%、男性20代4月は77・6%、6月77・5%、女性10代は4月が45・5%、6月が78・3%、女性20代は4月が54・4%、6月が61・4%であった。

同調査のなかのChatGPTの性年代別（利用率）の変化を見ると、全体では4月12・1%、6月15・4%、男性10代は4月20・0%、6月40・0%、男性20代4月21・4%、6月33・8%、女性10代4月4・5%、6月17・4%、女性20代4月13・2%、6月16・0%であった²。結果を見る限り、若者に限らずどの世代にも言えることではあるものの、認知はしているも利用率は低くなる傾向があるようだ。

ICT市場調査コンサルティングのMM総研（2023）は、日本と米国の

企業・団体に所属する従業員を対象に「ビジネスでのChatGPT利用動向」に関するアンケート調査を実施した。結果は、米国企業のChatGPT利用率は51%だったものの、日本は7%であった³。

様々な解釈が可能で、MM総研が論じたように、「経営層の関心度合い」の差であることも確かだが、その前提として、日本では、どの世代にも見られる認知度と利用率の差は、世界の最先端の技術が自分のスマホから使用できるにもかかわらず、それを使用してみたい、みようとという好奇心の問題だと解釈することもできそうだ。

もちろん、日本の数字を問題点としてだけ読み込むのではなく、具体的な利用用途があつて初めて使用しようとする慎重さとの関連だと読み取ることでも可能だろう。あるいは、情報漏洩やシンギュラリティなどの議論もあるためAIそのものに対しての慎重な態度・姿勢だと考えることもできそうだ。新しいものに次々と何でも食いついてみる、あるいは、みるべきではないという価値観が関係していると解釈することも可能である。

では、若者たちはChatGPTをどのよ

うに考えているのだろうか。科学立国のための大学教育変革センターDBER Centerの日本の「大学生のChatGPT利用状況と能力形成への影響に関する調査結果（速報）」（2023）が全国の大学生4000人を対象に行ったインターネット調査では、ChatGPTの認知率は89・8%、利用率は32・4%で、授業などのレポートへの利用率は全体で14・0%、利用者のなかに限って言えば43・2%、日常的な学習でのChatGPT利用率は、全体で20・1%、利用者に限定すると61・9%であることが分かった⁴。

ここにも、認知はしているものの、利用はしない者の多さが見てとれる。ゼミ、及び、授業履修者に対してChatGPTについて意見を聞いてみたところ、様々な回答が出てきた。単純に、興味が無い、持てないというものもあった。

また、ある学生は、「レポートは自分の力でやらなきゃダメだよ」と述べた。この意見は他の世代にも当てはまることだろう。筆者自身も、ChatGPTを使用しているものかどうか混乱することも多い。論文での使用は言うまでもなくするつもりはないが、ちょっとし

た文章やメールであっても、ChatGPTを頼ることに罪悪感と後ろめたさがつきまとう。このように感じてしまうのは筆者だけなのだろうか。ここには、日本人の問題があるように思えてならない。それが、見事に、アメリカの企業では51%、日本の企業では7%という数字にもしっかりと表れていそう。この点においては他の世代の考え方や価値観が若者にもしっかりと継承されていると考えることができる。

しかし、学生が語った「自分の力」とは一体何を指すのだろうか。現代社会ではそれを改めて問い直す必要があるように思えてならない。どのようにAIを活用できるのかということも立派な「力」であるという考え方も可能だ。それでも、それを「力」とは考えない価値観が依然として強固に日本社会を覆っている。そんな社会の価値観や風潮に疑問を抱いたり、打破したりしていく必要があるだろう。

若者たちから拾えた他の意見も見てみよう。「手を出してしまうと戻れなくなりそう」や「依存のリスク」も興味深い。スマホについても、「戻れなくなった」と考える若者は一定数いるだろう。

おそらく、これまでの生活に戻れなくなったという意味合いだと思われる。また、自分自身をスマホ依存だと捉える若者も少なくない。例えば、TikTokやSNSにはそのような要素が十分にある。もちろん、作り手自体が依存するように行動経済学や心理学などを駆使しているという議論も複数出てきている⁵。

その他にも、周りの友人が使用していない、話題にすらなっていない、（レポートなどで）使用すると目立ってバレそうという意見もあった。金間大介（2022）の『先生、どうか皆の前でほめないで下さい』では、とにかく目立ちたくない若者たちの心理が鋭く指摘された。確かに、若者たちは、浮いた行動を徹底して避ける傾向があり、大学でも服装や行動など様々なところに金間の指摘は見取れる。

本節の最後に、ChatGPTを知るきっかけとなったのは、友人やテレビ、ネットニュースなどが多いものの、なかには、TikTokであったり、YouTubeであったりもするようだ。ある学生は人気YouTuberの東海オンエアで初めて知り興味を持ったと教えてくれた。出会いは重要で、それ次第で若者たちが興

味の度合いも変化するようだ。

大学生はChatGPTをどのように使用しているのだろうか

実際の大学生たちはChatGPTをどのように使用しているのだろうか。筆者の行った調査では、ちよつとした調べごとや推しについて検索してみたという意見が多かった。とはいえ、出てくる情報があまりにもいい加減、適当にそれっぽいことばかり言われるという感想も目立った。なかには、レポートで出た内容についてChatGPTで調べてみたものの授業の内容と照らし合わせる間違えているような気がして使用することはなかったという意見もあった。

また、Excelについての問題をChatGPTに相談したところ、しっかりと答えが出てきたようで、難題だったにもかかわらず、正解できたことを自慢げに話す学生もいた。英語の翻訳をしたり、先生へのメールが圧倒的に早くなったと話す学生もいた。敬語が苦手なので、ChatGPTでしっかり添削してもらい楽になったという意見もあった。これに対しては、文章力という意味で自分自身にも自信がないの

だろう。自己肯定感の低さは、こうしたところにも見られるのかもしれない。ChatGPTは、それをカバーしてくれるツールにもなっていると言えそうだ。

ChatGPTの別の使用方法として、友人に対しても、返信が面倒くさいときは文章をコピーして何案か候補を出してもらって、再度コピーをしているなどの意見もあった。あるいは、自分自身の恋愛の相談を試してみたところ、しっかりと回答が返ってきたため何時間も相談し続けたという話や、友人のようには話しかけてみたり、占いしてみたり、アドバイスを受けたら、愚痴に對してポジティブな返信ばかりを頼んでいるなどの話もあった。バイトを休む理由を考えてもらったり、無茶ぶりをしてみたり、ネットに出ていたネタを試してみたりする者もいた。忘れてはならない使用方法の1つが、「自分のことをChatGPTにある程度教え、エントリーシートを書く」である。しかし、筆者が聞いた範囲内では、出上がった文章に満足がいくのかといえどこか満足いかず、その後何度も自分自身で修正したり、ゼロから書き直したりしたという。

エントリーシートをChatGPTで書くことについては、2023年6月1日に『東京新聞』や、6月25日の『朝日新聞』にて報じられた。『東京新聞』では、使用すると楽という意見やバレそう、ズレそうで使用しないなどの意見が掲載された。『朝日新聞』では、近年の若い世代が気にする「タイパ（時間対効果）」などの意味合いでも、学生のニーズに合うのではないかという指摘が掲載された。稲田豊史（2022）が『映画を早送りで見ている人たち』のなかで、映画そのものが本当に面白いのかどうか分からないものに時間をかけることはタイパが悪いと指摘している。受かるのか分からない就職活動のエントリーシートにたくさん時間を使うことはある意味タイパが悪いのかもしれない。とはいえ、全体的には、どこかで素直にそこで拾えた情報を信じるというよりも、ウソや適当な発言も多いことを知りつつ、ChatGPTの返信に対して疑ってかかる目も持っている学生が多いように思えた。また、使用しすぎることに対して関心を持っている姿勢が読み取れた。TikTokやSNSをはじめスマホに對して中毒意識を持っている若者は少なく

ない。なかには、あまりにも長時間使用してしまうためTikTokをアンインストールする若者もいるくらいだ。ChatGPTに対してもハマることを恐れるという考えも少なからず見受けられた。生まれて間もなくスマホが普及しているZ世代にとって、また、圧倒的な時間をスマホに使用している自覚のある世代は、新しいものに対して何でも受け入れていくわけでもなさそうだ。新しいメディアに対して疑問を抱くりテラシーがしっかりと備わっているのであれば、この点は、今後、メディアがどのように変化したとしても、アイデンティティとしてメディアとの付き合い方を自分の内部に刻むことができていけば、しっかりと判断をしたり、メリット、デメリットの両者を見たりすることができるといふ意味で新たな希望になりそうだ。

ChatGPTを用いた今後のコミュニケーション

最後に、若者たちの特徴をふまえ、ChatGPTの今後について考えてみよう。まずは、全員ではないものの孤独さに弱いという若者たちの特徴をふまえるとして、ChatGPTは、それを紛らわしてく

れるツールになりえるだろう。

話せば話すほど、データが蓄積されていくという面は、ある意味、学生時代に時間をひたすら共有していくリアル時代の友だちとも変わらないのかもしれない。データの蓄積が継続していけば、リアルな友だちよりもChatGPTは、誰よりも自分自身の理解者になり得る存在だと言っても過言ではない。

「かまつてちょうだい」を略した「かまちよ」な人にとつてみれば、これまでは、LINEやSNSを使用するため、リアルな誰かを常に巻き込む必要があった。あるいは、返信がなければそれが凹む理由にもなったはずだ。しかし、ChatGPTであれば、深夜でも早朝でも、自分からのどんなメッセージであっても、しっかりと反応してくれる。無視などはありえない。相手は無機質なAIであっても、筆者たちは、どんなもの、こと、場所に対して、キャラクターを見出すリテラシーは既に備わっている。自分のことを理解してくれていることと、相手をキャラ化することができていけば、筆者たちはChatGPTに愛着を抱くことは容易いことなのではないだろうか。依存やハマ

ってしまう若者は確かに出てきそうだが、むしろ、リアルな友人との関係よりも採めることも空気を読むことも不要で面倒ではない新しい関係性が築けるようになるのかもしれない。

2つ目に、Googleの検索のように、ChatGPTに何でもたずねてみるという文化が定着した場合はどうなるのだろうか。確かに、誰かが常にアドバイスをくれるのであれば、便利であることは間違いない。では、AIのアドバイスどおりに選択をした場合どうなるのだろうか。例えば、AIのアドバイスどおりに話して動いて恋人ができたときに、筆者たちは、それをどのように、解釈すればいいのだろうか。告白をOKした相手は、告白した者の何をいいと思ったのだろうか。評価されたのはそもそも、中身ではなく「振る舞い」なのだろうか。

同様に、AIのアドバイス通りに話をして、動いて、仕事があまくいった場合はどうなのだろうか。その成功によって評価されるのは誰なのだろうか。このようなことがあちこちで発生した場合、あるいは、政治で実行された場合、その際に作られた社会は人間が作ったものなのか、AIが作ったものな

のだろうか。AIが自分のことをふま
えればふまえるほど、よきアドバイザ
ーになることは確実なはずだ。そこで
得られる意見はないがしろにはできな
いはずで、筆者たちは、いつの間にか
AIの指示通りの行動や言動をしてし
まう可能性もある。

であれば、中身よりも「振る舞い」
こそが重要な要素を持つことになる。
何かを振舞うことが評価の対象となる
社会という意味である。

筆者たちが他者をとらえる場合、多
くの場合がキャラとして他者をとらえ
たり、ルッキズムの批判はあつても見
た目がますます重視されているような
昨今の社会は、すでに中身ではなく「振
る舞い」ばかりが評価の対象になつて
いるのかもしれない。

3つ目に、傷つきやすい若者たちと
の関係でChatGPTを捉えてみよう。音
声での出力や入力などのテクノロジ
の進歩もまだまだ必要な要素ではある
ものの、ChatGPTが筆者たちのコミュ
ニケーションの間に常に入ることにな
つたらどうなるのだろうか。

つまり、他者を行うコミュニケーション
はなくなるということだ。自分が

何か発話した場合、まずは、それを自
分のChatGPT（先ほど2つ目で論じた
アドバイザー）が拾う。その後、相手
のChatGPTにやさしく角が立たないよ
うに変換されて伝える。さらに、それ
を相手のChatGPTが読み込む。それを
相手に対して相手のChatGPTがさらに
毒素を抜いて、相手のことをふまえて
伝える。このように間でChatGPTが機
能すれば、世界から対人間同士の直接
的なコミュニケーションはなくなり、
傷つく経験すらなくなる可能性がある
と筆者は考えている。

今までも若者たちは、他者に対して
徹底して配慮をして傷つけないように、
そして、相手の地雷を踏まないように
コミュニケーションをしてきたことは
社会学の若者研究でしばしば指摘され
てきたことだ。このようなコミュニケ
ーションをChatGPTが間に入ること
で完全に傷つかないコミュニケーション
を作り上げることが可能になる。

しかし、それが正しい道かと言えば、
多くの人はディストピアだと考えるの
ではないだろうか。むしろ、筆者もこ
うした社会を望むわけではない。とは
いえ、このような社会になつてこそ、

人類は、孤独とは何か、振る舞いとは
何か、コミュニケーションとは何かな
どの問題を考えられるのではないだろ
うか。そのような問いを見出せるので
あれば、AIがベースの社会であつて
も、そこに人間らしさを加えられるこ
とだろう。さらに言えば、このような
ディストピアがおとずれの前から、様々
な問いを持つことができるようなこと
を教育のなかで行っていくことが生成
AIに対しての共存の方法、あるいは、
対抗手段なのではないだろうか。

- 1 ゼミ生30名から拾えた意見、及び、148名が履修するメディアサービス論の授業にてChatGPTについての意見から拾えたものを参照とする。
- 2 NRI日本のChatGPT利用動向（2023年6月）
https://www.nri.com/jp/knowledge/report/1st/2023/06/0622_1
- 3 日米企業におけるChatGPT利用動向調査
<https://www.n2ri.jp/release/detail.html?id=580>
- 4 DBER Center 大学生のChatGPT利用状況と能力形成への影響に関する調査結果（速報）（2023年5月）
<https://dber.jp/chatgptsurvey/>
- 5 例えば、アダム・オルター（2019）の『僕らはそれに抵抗できない』では、依存症になるようにデザインされたテクノロジの問題が扱われている。
- 6 金間大介（2022）『先生、どうか皆の前でほめないで下さい』東洋経済新報社
- 7 稲田豊史（2022）『映画を早送りして観る人たち』光文社